

## 保育計画成果報告書

|         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 法人名     | 学校法人 高座学園                     |
| 施設名     | 幼保連携型 認定こども園 高座みどり幼稚園         |
| 報告者（役職） | 鈴木 裕一 （ 常任理事兼事務長 ）            |
| 住所・連絡先  | 神奈川県大和市南林間 2 - 1 4 - 8        |
|         | ☎ 046-274-0372                |
|         | E-mail hrsuzuki@zb.wakwak.com |

### ○タイトル（保育計画）

「水と命」・・・小川とビオトープから自然を感じ・知り・愛し、そして、自然が育む命の大切を知る。

### ○主な助成備品

ビオトープと手押しポンプ

## 1. 保育計画策定の目的

高座みどり幼稚園は1949年に開園し、これまでの66年間に5843名の卒園生を送り出しております。2015年4月から子ども・子育て支援新制度の発足に合わせて、「幼保連携型 認定こども園 高座みどり幼稚園」としてスタートしました。

認定こども園では、従来の幼稚園とは異なり、0歳～5歳の幅広い年齢のこども達が、教育・保育時間が4時間（標準時間保育）から11時間（長時間保育）と様々な保育条件の中で共に日々の時間を過ごしております。このような「こども園」の教育環境にとって大切な点は、年齢や保育条件に係わらず、誰でも楽しく遊び、学べる遊具や施設であり、特に、自然を感じ・知り・愛し、そして、自然が育む命の大切を知ってもらうための保育環境の必要性を痛感しておりました。

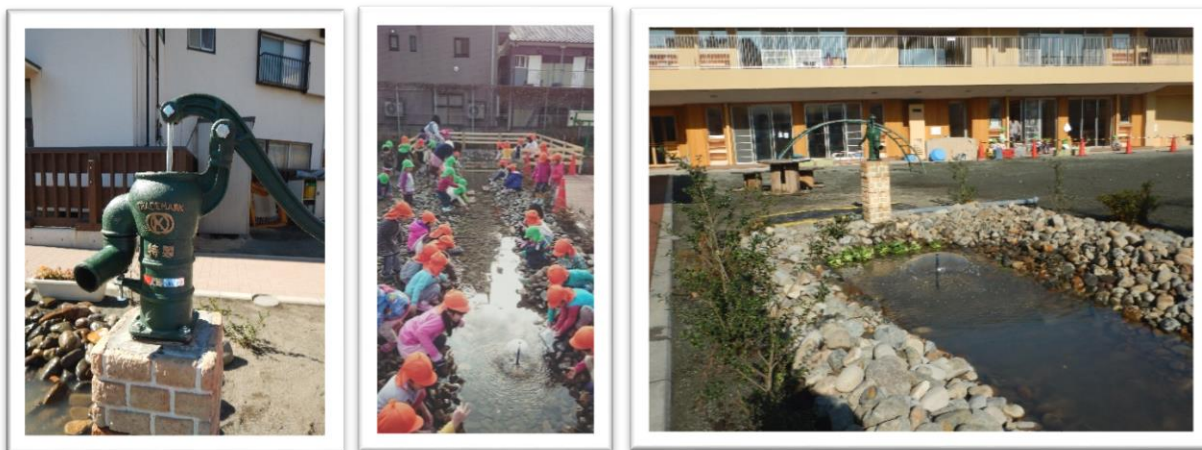
2010年に独立行政法人国立青少年教育振興機構から発表されている「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」によれば、子どもの時期に自然体験が多く、動植物とのかかわりが多いほど、自尊感情、共感性、意欲や関心、人間関係能力が優れた大人になると報告されております。また、この研究結果では、自然体験と動植物へのかかわりは、特に小学校低学年までに体験することが望ましいとされております。このことから、こども園のビオトープでの自然体験を通じて、人間関係能力の形成にとって、必要な資質をもった人格をこども達の中に育んでいくことが大切な事と捉えて保育計画を策定いたしました。

## 2. 具体的な実施内容

園庭内に井戸を掘り、ガチャポンプでくみ出される水が小川に流れ、それがビオトープの池に注ぎ込まれ、畑へと流れる「自然のみのり」を知る施設を作りました。

0歳～2歳のこども達が井戸水に親しみ、小川での水遊びを楽しめる様に、浅瀬の小川にしました。3歳～5歳のこども達は小川の水遊びに加えて、やご等の自然の営みを感じて知る場として、「トンボ池」と称するビオトープの池を作りました。ただし、ビオトープは乳幼児も接する場となるため、20センチ以下の浅い水深としています。

「ガチャポンプ」「ジャブジャブ川」「トンボ池」とこども達が親しめる呼称を通して、こども達自身が考え、学齢を超えての一緒に遊ぶ中から連帯感を育み、豊かな人間関係を作る場としています。何よりも、こども達が水や自然の大切さを知り、水遊びの楽しさを経験し、自然界の営みから命の尊さを感じる教育の場となるべく施設としました。



## 3. その成果と評価

「こども園のビオトープ」は2016年1月に完成いたしました。水を張り、春の訪れとともに水温も安定し、4月に300匹ほどのメダカをビオトープに放し、水草を入れたところ、自然にアメンボもやってきて、水面を跳ぶようになりました。小さな巻貝であるサカマキガイも水草についていたのか、6～7月には驚くように増えて池に敷いた多くの石にサカマキガイが居ることを子どもたちは発見し、その環境の中で、子どもたちは多くのことを学んでいきました。ビオトープでの「保育事例」を以下にご紹介いたします。

＜保育事例＞： 6月半ば4歳児（降園時間の園庭、ビオトープで）

母親が迎えに来て教師と別れの挨拶をした後、母親たちがしばらく園庭に残っていた。



男児AとBは母親のそばを離れ、ビオトープをのぞきに行く。

男児A「池の中の貝を捕ろう！」池の中に右手を入れ貝を捕まえて左手で持つ。

男児B「うん、取ろう！」とAと同じように捕まえる  
AとBはそれを繰り返し、左手にそれぞれ4～5匹

の貝を握りながら、貝を捕まえ続ける。

二人を見て、他の子ども達も寄ってきて、池をのぞく。



女兒C「アメンボ…」と指さしながら見つめている。

「どこから来るの？」と聞く。

保育者「アメンボはね、羽を出して飛んで来るの」

女兒C「飛べるの?!」とうなずきに、そうなんだと  
いうように驚きながら納得する。

貝捕りが続く。

男児A「あ、逃げた。」池の中の石の上に居た貝が、  
身を交わして石から転がり、池の底の方の石の隙間に入り込んだのを見て、石を持ち上げる。  
探していたサカマキガイではないが、別のサカマキガイが2匹、石の裏側に貼りついて  
いるのを見つける。

男児A「おい！（Bに呼びかけ）石の裏に（貝が）ついてるぞ！」  
それを聞いて男児Bも石を次々持ち上げる。「（貝がついているのを発見）ついてる！」  
女兒Cと後から来た男児Dも男児AとBのやり取りを眺めたり、盛んに泳いでいるメダカ  
やアメンボを見つめたりする。さらに他の子どもたちも集まる。



やがて子どもの様子を見ながら園庭で話し合っていた母  
親たちが、ビオトープに居る子どもたちを迎えに来た。

男児A母親「貝は逃がしてあげようね。持って帰れない  
から。水からあげたら可哀そうだから。」

男児A、B 左手を広げて貝を見つめて考える。

母親からの再度の促しに、貝を残念そうに池に戻す。

母親「また明日ね。」

一時、7～8人が池の周りで生き物を観察したり、貝を取る子どもに加わったりしていた  
が、母親が迎えに来て、子どもたちは一人また一人とビオトープに別れを告げて降園して  
いった。

今回の事例は降園前の15分ほどの時間の出来事でしたが、その短い時間の中でも、ビ  
オトープの生き物を囲んで友達と遊ぶ楽しい時間をこども達は過ごしていました。貝を捕  
ることに夢中になり、貝が石の裏についていることを発見し、アメンボが水面をスイスイ  
移動する姿を不思議そうに眺め、どうやって園のビオトープに来たかを知りました。最後  
には貝を水に戻すこともできました。

また、他の日には、こども達は保育者からビオトープのメダカの生態について「メダカ  
の卵がどのようにお腹につき、それをどのように水草に産み付けるのか、その後、卵が孵  
って子メダカが増えていく様子など」を熱心に聞いていました。

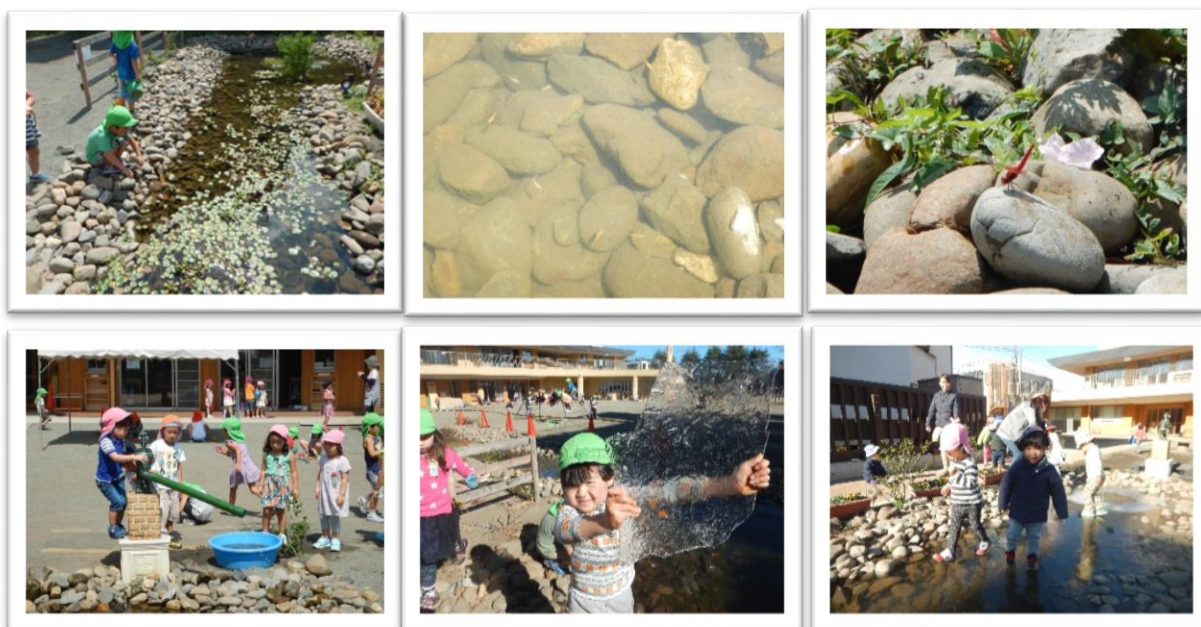
後日、こども達は水草を持ち上げて卵がついているかを自ら確認し、水草の中に小さな  
透明な卵を発見して喜んでいました。



また、台風が来て大雨が降って水が溢れた時は、メダカが外の水たまりに出てしまい、それを発見した子どもたちは保育者に急いで告げて、メダカと一緒に池に戻しました。それ以来、大雨が降ると登園後、朝一番でビオトープに飛んでいき、メダカが出ていないか心配して確認するようになっています。

ビオトープの水辺はこども達を引きつけ、多くの自然科学の発見をもたらしています。たくさんの小さなメダカの卵は、命の誕生とその喜びを子どもたちに実感させるもので、特に、貝などを捕まえることは幼い子どもにとって大きな楽しみであるが、その後はそれを無駄に死なせることはしないものだという大人の促しによって、命を大切にすることと、セルフコントロールを学んでいます。

このようにビオトープは日々、こども同士での楽しい遊び場となり、子どもたちが自然科学の知識と共に、命は大切であるという価値観や感情そのものを学び共有する場となっています。



#### 4. 今後の課題と展望

今回のご支援を契機に構築した「こども園のビオトープ」ですが、当初の私たちの予想を超えた経験をする事が出来ました。いろいろな生き物の発見はこども達に大きな驚きと感動を与えました。遊びの場としても、夏の水遊びのみならず、厳冬のビオトープ上に張る氷も素敵な遊び道具になりました。こども達同士や保育者との交流はもちろん保護者の方々とこども達の会話も深まり、素晴らしいコミュニケーションの場となりました。

今後の課題は本来の目的の一つである、自然の中でこども達自身が考え、遊びを工夫していく事などからの更なる連帯感を育み、豊かな人間関係を作る様々な経験ができる施設へと充実していくことです。更に、これまでのビオトープでの保育経験の反省を踏まえて、新たな視点での保育計画の策定も進めてまいります。

以上